

## ハイデルベルク信仰問答講解説教 31 「回心」(2012年4月1日 礼拝説教)

## 【聖書箇所】

【ダビデの詩。マスキール。】いかに幸いなことでしょう／背きを赦され、罪を覆っていただいた者は。いかに幸いなことでしょう／主に咎を数えられず、心に欺きのない人は。わたしは黙し続けて／絶え間ない呻きに骨まで朽ち果てました。御手は昼も夜もわたしの上に重く／わたしの力は／夏の日照りにあって衰え果てました。〔セラ。 わたしは罪をあなたに示し／咎を隠しませんでした。わたしは言いました／「主にわたしの背きを告白しよう」と。そのとき、あなたはわたしの罪と過ちを／赦してくださいました。〔セラ (詩編32:1-5)〕

イエスは、フィリポ・カイサリア地方に行ったとき、弟子たちに、「人々は、人の子のことを何者だと言っているか」とお尋ねに言った。弟子たちは言った。『洗礼者ヨハネだ』と言う人も、『エリヤだ』と言う人もいます。ほかに、『エレミヤだ』とか、『預言者の一人だ』と言う人もいます。イエスが言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」シモン・ペトロが、「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えた。すると、イエスはお答えになった。「シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ。わたしも言っておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てて。陰府の力もこれに対抗できない。わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつなされる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」それから、イエスは、御自分がメシアであることをだれにも話さないように、と弟子たちに命じられた。(マタイ16:13-20)

## 【説教】

先日、ある教会員の方からこういう話を聞きました。その方が以前教会生活をしてきた教会での話、その教会の牧師の娘さんが悪気は無かったのですが、結果として警察に捕まってしまうような事件を起こしてしまった。その娘さんは今度高校生になるまで未成年ですが洗礼を受けておられた。父親でもある牧師は教会で役員会を開き、教会員である自分の娘の戒規を決めました。御自身も責任をとって辞任するような覚悟もしておられたそうです。

一方でこういう話もあります。東京のある教会での話、その教会の牧師は教会員である女性から相談を受けた。同じ教会員である夫が別の女性と関係を持っている。その牧師は牧会する教会の中でそういう問題が起こったことを大変嘆きます。しかしそのことがその後どうなったのか。誰も知りません。完全に封印されました。皆さんはこの二つの話をどう受け止めるでしょう。考えていただきたい。

少し衝撃的な内容から今日の説教を始めました。世にある教会はいろいろな問題が起こります。思いもよらない事態に直面する。教会だからそういうことは起こらないという保証はどこにもありません。いやむしろ教会は社会の縮図のようなところでもあります。ただ肝心なことは、問題が起こった時にそれとどう向かい合うか。どう対処するか。そこでこそ教会としての真価が問われると思います。そう言いながら、ではあなただったらどうか。同じような立場になったらどう判断し対処するか。決して他人事ではないのです。どうせ人間は罪人なんだから、弱いから仕方が無い。あるいはあまり波風をたてなくても、穏便に済ませてしまう。それでよいのでしょうか。それでは全く解決していないのです。それはあきらめであって、わたしたちの中に働いているキリストの命、その本当の力を見くびっているとしか言えません。

確かに、この罪の世に生きる今は、わたしたちはまだ完全ではありません。おぼろげに神さまの栄光を映し出している存在に過ぎません。けれどもキリストに結ばれ、その新しい命を生かされている者としてわたしたちはその輝かしい光を内に秘めております。「あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい」(マタイ5:16)と主イエスは言われました。それは何かわたしたちが元々持っている倫理的な素質を要求しているのではなく、わたしたちはキリストの十字架と復活の御業、福音によって罪赦され、光の子とされているのです。それゆえにわたしたちは、この罪の世にあってキリストの光を輝かす役目を担

っているのです。それはこの世が全く罪の闇に支配されてしまわないためです。そういう意味で教会は言わば最後の砦であります。その自覚が求められます。

今日の信仰問答では聞き慣れない言葉が出てきました。それは「鍵の務め」という言葉です。この言葉は、すでに問82のところで出てきました。聖餐に与る相応しさを扱う中で、不信仰と背信を示している人たちは鍵の務めによって、聖餐の食卓から閉め出す責任があるということが言われます。聖餐は、洗礼を受けてキリストに結ばれ、その罪の赦しと新しい命を生かす者がその恵みを確かめる聖なる食卓であります。思い起こしていただきたいのは、この信仰問答では、聖餐に与る時に、聖霊が働いてわたしたちは天のキリストといよいよ一つになるということです。「聖霊によって、その祝福された御体といよいよ一つにされていく」(問76)「聖霊のお働きによって、そのまことの体と血とにあずかっている」(問79)「聖霊によってキリストに接ぎ木されている」(問80)これらの言葉が示していることは、キリストとの一体化です。聖書では教会はキリストの体と言われますが、それは単なる比喩ではありません。わたしたちは本当にキリストの体の一部になるのです。その栄光の御体となる。信仰によってキリストに結ばれて、わたしたちはキリストの一部になっているのです。

今日も主の食卓が備えられています。聖餐に与る度にわたしたちはそのことを思い起こし確かめています。けれども自らその恵みを否定し、ないがしろにするような行いをしているならば、果たしてそのままキリストの体に相応しいのでしょうか。この聖餐に与れるのでしょうか。同じ一つの体にそぐわないのです。それはやはり悔い改める必要があるのではないのでしょうか。信仰問答は、それを鍵の務めによって促そうとしています。

そこで鍵の務めとは何かということになります。信仰問答は二つのことをあげます。問83を読みましょう。聖なる福音の説教とキリスト教的戒規。更にここでこの鍵とは天国の門の鍵であることが分かります。その天国の門を開いたり閉じたりする、そういう鍵の務めを教会は持っているということです。本当にそんなことがあるのかと疑問に思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、でもこれは聖書に根拠のあることであります。

今日はマタイによる福音書の御言葉を読みました。ペトロの信仰告白のところです。ペトロが主イエスに向かって「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えた。すると主イエスは次

のように言われます。16:17-19を読みましょう。この「つなぐ、解く」というのは、鍵によって開いたり閉じたりすることです。この天の国の鍵をペトロは授けられます。しかしこれはペトロ個人に与えられたものでしょうか。そう解釈するのがローマカトリック教会です。そして代々の法王がこの天国の鍵を継承すると考えます。ですから法王は絶対的な権威を持っています。しかしわたしたちのプロテスタント教会ではそう解釈していません。この「あなた」はペトロ個人ではなく、あくまでも教会を代表してペトロのことを指しているのであって、天国の鍵が誰か一人に与えられているとは思えないのです。それは教会に委ねられている。

実はマタイ福音書の18章に同じ言葉が出てくるのですが、そこでは「あなたがたが地上でつなぐことは、天上でもつなぐられ、あなたがたが地上で解くことは天上でも解かれる」と「あなたがた」と複数になっています。またこれはヨハネ福音書で復活の主イエスが弟子たちに現れたところで、主イエスが弟子たちにこう言われた。「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る」(ヨハネ20:22-23) これも同じ天の国の鍵と理解することができますが、ここでも主イエスはこれを弟子たち、すなわち教会に託されているのです。

しかし、この破れの多い教会がどうしてそのような天の国の鍵を持つことができるのか。それは最もな疑問です。そして本来教会にはそのような資格はないと言わざるを得ません。でも主イエスはそれでもこの破れ多き教会にそれを託されたのです。どうしてでしょう。それは主イエスの十字架と復活の御業があるからです。その福音の御業に生かされている限りにおいて、教会はこれが可能なのです。ですから逆を言えば、福音に生かされていなければ教会はそのような戒規を行うことはできません。キリストの福音こそがこの戒規を理解する鍵になります。

そこで注目していただきたいのは、この鍵の務めを信仰問答は、まず「聖なる福音の説教」であるとしている点です。福音とは言うまでもなくキリストの十字架と復活の御業です。それによる罪の赦しと新しい命であります。問84には「福音の証言」とあります。それは「証言」であって、福音に関する一つの解釈とか理解ではありません。実際にキリストの十字架と復活の御業に救われることの証言です。教会ではこれを聞き続けることとなります。日曜日の礼拝において、この場所で宣言されることは、福音の証言に他なりません。またそれは公であり、秘密裏に行われていることではありません。公言されているのです。誰でも聞くことができます。誰もが招かれています。限られた特定の人たちだけのものではない。そして聞いた者すべてに救いの約束が示されるのです。キリストによる罪の赦しと永遠の命が告知されるのです。この福音こそが、わたしたちを悔い改めさせ神さまに立ち返らせるのです。それは一度だけではありません。繰り返すということがこの説教では起こる。そこに説教の持つ鍵の務めがあります。

もう一つの鍵の務めは戒規です。問85を読みましょう。これを読むと単なる罰則にしか聞こえないという人もいるでしょう。具体的にはここには三つの段階で戒規が行われていることが分かります。まず兄弟による忠告、次に教会役員による訓戒、そして聖礼典の停止、これは聖餐に与れないということです。会衆からの閉め出しがイコール御国からの閉め出しとなります。しかし悔い改めを示すならば、その人は再び受け入れられるとあります。「キリストとその教会の一員として」わたくしはここが重要と思います。その人はキリストに受け入れられるのです。ですがそれを具体的に表すのは教会の一員となること、会衆、その群れに生きることです。そこには同じ罪赦された者がいる。その群れにおける交わりが重要なのです。「聖徒の交わりを信ず」と告白します。それはキリストとの交わりであり、また教会の交わりです。そこには人と人との触れあいがある。機械的に裁くのではない。「度重なる忠告」とあります。わたくしはそこに

愛を見ます。そこで涙を流し、悲しみ、祈る者の姿を見ます。この愛がなくて、どうしてその人が立ち直れるのでしょうか。悔い改めることができるのでしょうか。

そしてこの愛は、他にもないわたしたちのために命をささげてください。キリストに基づく愛であります。キリストがわたしたちのためにどれほど悲しみ、祈られているか。あのゲッセマネの祈りの姿を思います。その愛によってわたしたちは神さまに引き戻されるのです。いいですか。過ちを犯した者を本当に立ち返らせる力を持っているのはキリストです。わたしたちの作り出すちっぽけな配慮や気遣いが人を悔い改めさせるものではありません。戒規はキリストの愛によって悔い改めに導く救いの手段です。裁くことではありません。最後の裁きは神さまがなさるのです。そこまでわたしたちができることは何か。人間的に解決することではない。そこに救いはありません。ただキリストの福音を示し、その愛をもって接していくこと。仕えることなのです。それが戒規であり、わたしたちに委ねられた鍵の務めです。祈りをささげます。